

平成25年度全国学力・学習状況調査 堺市の結果について

堺市教育委員会 学校教育部

1. 対象学年及び受検児童生徒数

	国語 A	国語 B	算数・数学 A	算数・数学 B
小学6年生（93校）	7,791名	7,786名	7,792名	7,791名
中学3年生（43校）	6,878名	6,904名	6,912名	6,922名

2. 教科に関する調査結果の概要

<各教科区分の平均正答率>

H25 教科	小学校				中学校			
	国語		算数		国語		数学	
区分	A(知識)	B(活用)	A(知識)	B(活用)	A(知識)	B(活用)	A(知識)	B(活用)
堺市	62.1	47.9	77.4	57.2	72.1	61.8	60.6	37.6
大阪府	61.2	47.9	77.1	57.3	73.3	63.0	61.7	38.8
全国	62.7	49.4	77.2	58.4	76.4	67.4	63.7	41.5
府との差	+0.9	0.0	+0.3	-0.1	-1.2	-1.2	-1.1	-1.2
全国との差	-0.6	-1.5	+0.2	-1.2	-4.3	-5.6	-3.1	-3.9

※参考 平成21年度

H21 教科	小学校				中学校			
	国語		算数		国語		数学	
区分	A(知識)	B(活用)	A(知識)	B(活用)	A(知識)	B(活用)	A(知識)	B(活用)
堺市	67.6	49.3	78.2	53.8	70.8	65.8	58.2	50.2
大阪府	68.3	49.4	78.4	53.8	72.7	68.3	59.9	52.5
全国	69.9	50.5	78.7	54.8	77.0	74.5	62.7	56.9
府との差	-0.7	-0.1	-0.2	0.0	-1.9	-2.5	-1.7	-2.3
全国との差	-2.3	-1.2	-0.5	-1.0	-6.2	-8.7	-4.5	-6.7

小学校では、全体として府の平均を上回り、算数A（知識）で全国平均を上回るなど、知識に関するA問題で、改善がみられる。中学校では、前回調査と比べ、全教科で全国及び府平均との差が縮まるなど改善がみられる。

これらの結果から、各学校の学力向上の取組により改善の傾向にあるが、知識を活用する問題については、小中とも全国平均を下回っており、考える力を育成する授業を積極的に取り入れるなど、授業の質の向上が必要である。

【小学校】

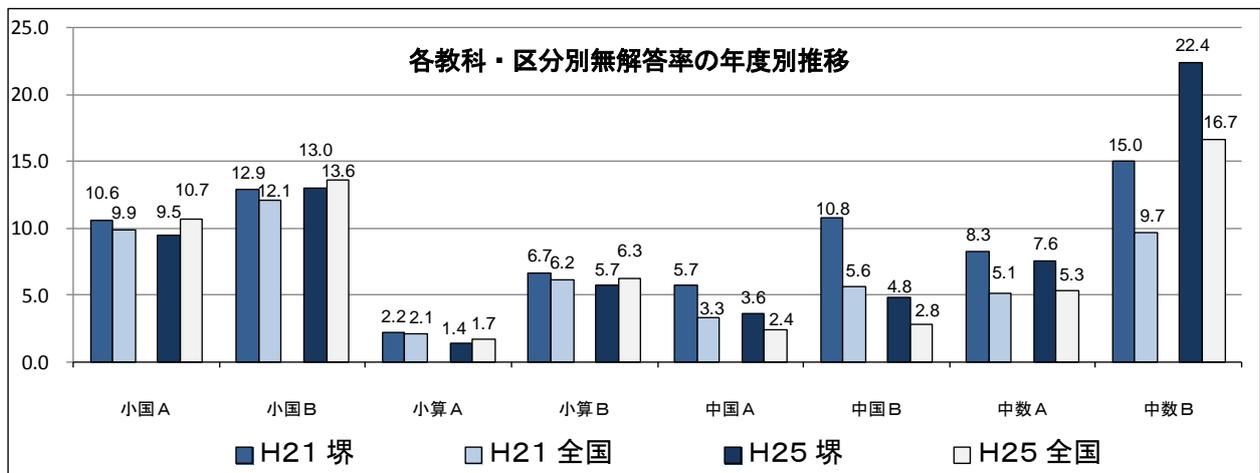
- 国語A ・漢字を書くことについては、全ての問題で全国を上回るなど、基礎的・基本的な知識・技能が定着した。
- ・文と文の意味のつながりを考えながら、適切に接続語を使う問題では、正答率が低く、課題である。
- 国語B ・「推薦文を読んで、推薦の理由を問う」問題では、全国平均を上回った。文章の中から必要な内容を適切に取り出し、まとめて書くことにおいて成果がみられる。
- ・自分の考えを具体的に書く問題で正答率が低く、目的や意図に応じ複数の内容を関係付けながら考えをまとめることに課題がある。

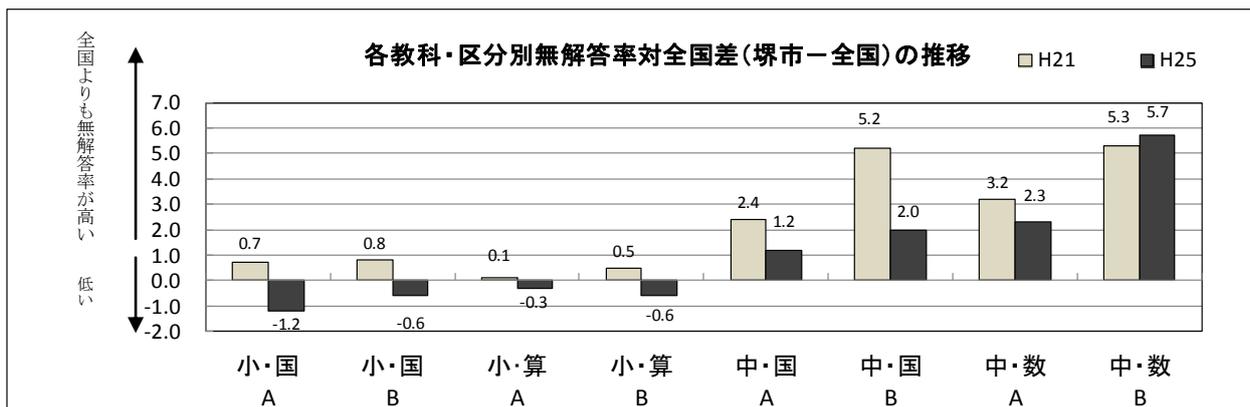
- 算数A
 - ・整数・分数の四則計算については、約9割の児童が理解できており、基礎的・基本的な知識・技能が定着した。
 - ・1 a (アール) の面積を考える問題の正答率が全国平均を下回り、単位の意味と大きさの関係を捉えることに課題がある。
- 算数B
 - ・言葉の式に数値を当てはめ、計算する問題では全国平均を上回った。計算の順序についてのきまりを理解することにおいて、成果が表れている。
 - ・二つの数量の関係が比例ではないことを書く問題では全国平均を下回り、二つの数量の関係を、算数的に説明することに課題がある。

【中学校】

- 国語A
 - ・漢字を書いたり、読んだりする問題では、全国との差が縮まっており、基礎的・基本的な知識・技能が定着した。
 - ・文の接続に注意し伝えたい事柄を明確にして書く問題では、正答率が低く、提示された条件をすべて守って書くことに課題がある。
- 国語B
 - ・文学作品の読み取りについては、正答率が高く、描写を丁寧に読み取る指導の成果が表れている。
 - ・自分の考えを書く問題では無解答率が高く、根拠を明確にして自分の考えを文章にすることに課題がある。
- 数学A
 - ・分数の乗法や関数の意味を問う問題では、全国平均を上回っており、基礎的・基本的な知識・技能が定着した。
 - ・一次関数の問題では、正答率が低く、表におけるx、yの変化の様子を調べ、変化の割合を求めることに課題がある。
- 数学B
 - ・2つの辺の長さが等しいことを三角形の合同を利用して証明する問題では全国平均を上回るなど、仮定から結論を導くまでの推論の過程を書き表すことを継続的に指導した成果が表れている。
 - ・分布を表すグラフを読み取る問題では正答率が低い。資料の傾向を的確に捉え、特徴を数式やグラフを用いて数学的に説明することに課題がある。

【無解答率について】

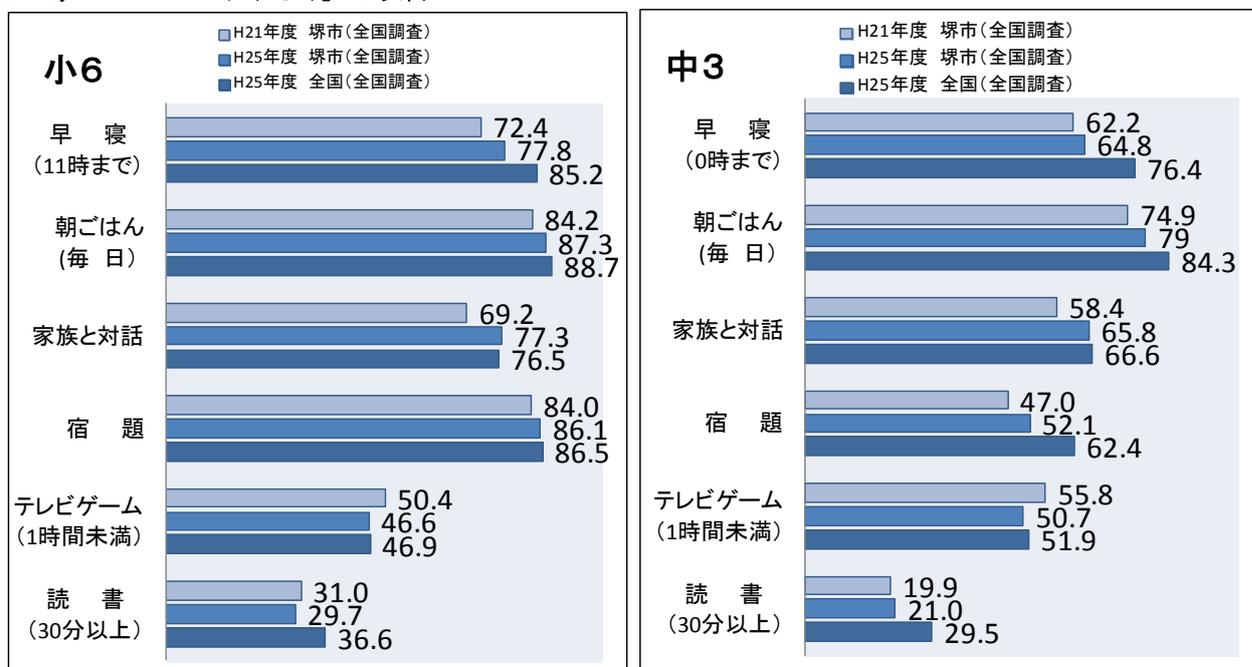




小中学校とも、これまでと比べて、中学校数学Bを除いて無解答率が減少している。特に小学校では、全ての教科・区分において全国平均よりも無解答率が低くなり、改善された。各学校が日常的に「書く」活動を取り入れ、継続的に指導してきた成果が表れた。

3. 学習・生活状況にかかる質問紙調査結果の概要

○「家での7つのやくそく」は改善

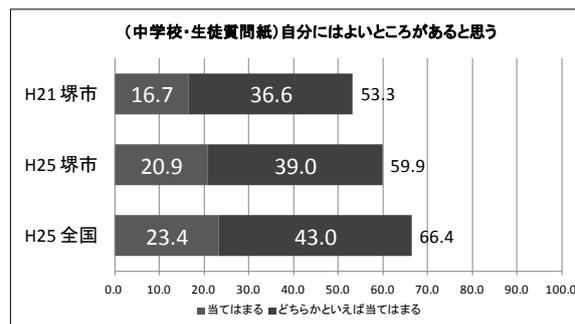
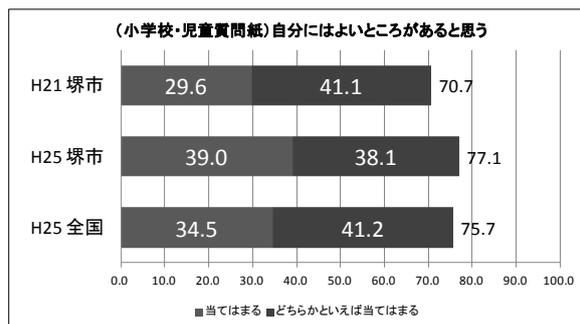


※「前日準備」は平成25年度調査の質問項目に含まれていない。

早寝、朝ごはん、家族と対話、宿題は改善しており、家庭との連携により、児童生徒の生活習慣の改善につながった。

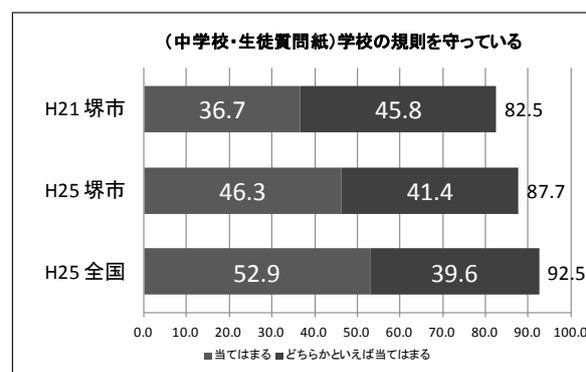
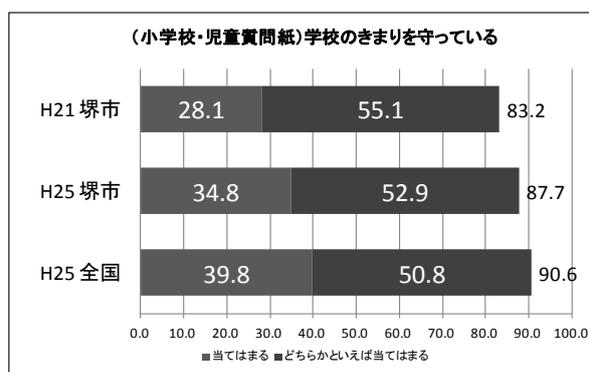
- ・「早寝」「朝ごはん」「宿題」については、全国平均より低いが、小中学校ともに前回調査（H21）と比べると改善された。
- ・「家族と対話」については、小中学校ともに、前回調査に比べるとほぼ全国平均と同じ程度まで改善された。
- ・「テレビゲーム」については、1日1時間未満の割合が全国平均を下回った。小中学校ともにテレビゲームを1時間以上している児童生徒が増加しており、課題である。
- ・「読書」については、小中学校ともに30分以上読書をしている児童生徒の割合が全国平均よりも低い。引き続き読書ノート等を活用し、読書に親しむ環境づくりについて学校と家庭が連携した取組を進める。

○自尊感情が高揚



小中ともに「自分にはよいところがある」と思う児童生徒の割合が、平成21年度と比べて増加し、小学校では全国平均を上回った。一方、小学校で約20%、中学校で約40%の児童生徒が自分のよさを感じられていない状況にある。引き続き、一人ひとりが大切にされる授業づくりや、互いのよさを認め合う仲間づくりなど、人権尊重を基盤とした教育活動の充実に取り組む必要がある。

○規範意識が向上



「学校のきまり（規則）を守っている」児童生徒の割合は、前回調査（H21）より小学校で4.5P、中学校で5.2P増加した。

全職員の共通理解のもとに毅然とした態度でねばり強く指導を行うとともに、ルールの意義やマナーを守ることの大切さを理解させる指導の充実を図ったことなどが、児童生徒の規範意識の向上につながっている。